

平成 21 年 6 月 22 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18720018

研究課題名（和文） 外国人による日本神話研究の歴史とその影響に関する研究

研究課題名（英文） The research on the history and effect of the study of Japanese mythology by foreigners.

研究代表者 平藤喜久子

國學院大學研究開発推進機構専任講師

研究者番号：50384003

研究成果の概要：外国人による日本神話研究の歴史とその影響について、明治期に古事記、日本書紀の翻訳、研究を行ったイギリスのチェンバレン、アストンやフランスのロニ、ドイツのフローレンツらを取り上げて分析した。とくに 19 世紀のヨーロッパにおける神話学、宗教学、人類学との関わりに注目し、マックス・ミュラーやタイラーといった当時の碩学たちと初期の日本学者の交流について資料調査、分析を行い、彼らの日本神話研究の歴史的な文脈について新たな知見を得ることができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,000,000	0	1,000,000
2007 年度	1,000,000	0	1,000,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,000,000	300,000	3,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：古事記、翻訳、宗教学、神話学

1. 研究開始当初の背景

日本の神話学は、一般的に高山樗牛、姉崎正治、高木敏雄の論文が相次いで発表された明治 32 年に発生したとされてきた。たしかに、日本人の研究者による日本神話の研究が本格化したのはこの年であり、申請者もその立場から研究を行い、論文を発表していた。しかし、外国人研究者たちは日本人の研究者よりも早い時期から日本神話に注目し、翻訳や研究を行っていた。彼ら外国人研究者による日本神話研究の歴史については、十分な形ではまとめられていなかった。

彼ら外国人研究者の研究活動は、日本の神話学のみならず海外の神話学にも少なからぬ影響を及ぼしてきている。また当然のこと

ながら海外における日本神話の研究の展開は彼らの翻訳なくしてはありえなかったといえるだろう。本研究は、彼ら外国人研究者による日本神話研究の歴史を詳しく検討するはじめての試みであり、この研究を通し、日本神話の学説史研究がより深められるだけでなく、広く宗教学、日本学、神道学などの隣接分野にも寄与することが可能であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、幕末の開国を機に本格化した外国人による日本神話研究、古事記、日本書紀の翻訳について研究し、それらの日本神話の研究史における位置づけを研究する。主たる研

究対象は、以下に挙げる 19 世紀後半から 20 世紀前半に活躍した研究者である。

- ・古事記を英訳した B.H.チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850~1935)
- ・日本書紀を英訳した W.G.アストン (William George Aston, 1841~1911)
- ・古事記、日本書紀のフランス語訳を手がけたレオン・ド・ロニ (Leon Lucien Prunol de Rosny, 1837~1914)
- ・日本書紀をドイツ語訳した K.A.フローレンツ (Karl Adolf Florenz, 1865~1939)
- ・日本神話や神道に関する論文を数多く執筆したアーネスト・サトウ (Sir Ernest Mason Satow 1843~1929)
- ・出雲に暮らし、エッセイの中で日本神話にも言及しているラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn 1850~1904)

彼らについては、これまで日本学や日本語学の草創期の研究者として研究が進められてきており、一部については、伝記なども出版されている。また、とくにチェンバレンやアストン、フローレンツによる記紀の翻訳や日本宗教の研究は、海外における日本宗教研究の基本的文献として現在でもその重要性は失われていない。にもかかわらず日本の神話学、宗教学史の中では、彼らが行った研究について、ほとんど取り上げられてこなかった。本研究は、これらの研究者の日本神話についての研究、言説を取り上げ、それを神話学史、日本宗教学史の中に位置づけることを目的とする。

以上のほか、1876 年に王立人類学会で「日本の神話」というタイトルで講演を行ったイギリスの人類学者 E.B.タイラーなど、日本研究者ではないが、日本神話について言及した同時期の宗教学者、人類学者についても研究対象に含めていきたい。

本研究ではこれらの研究者の日本神話研究について、とくに以下の点を考察する。

- (1) 当時のヨーロッパにおける神話学、宗教学との関係。
- (2) 研究者同士でどのような交流を持っていたか、その交流と研究への影響関係。
- (3) 研究者の宗教的背景、社会的背景と研究との関係
- (4) その後の日本神話研究への影響

本研究では、以上の調査、分析により、明治期にはじまる日本神話学の形成過程を明らかにし、近代の日本宗教学史について新たな理解を獲得することを目的とする。

3. 研究の方法

上記の研究目的の遂行のため、本研究では以下の研究方法を採った。

(1) チェンバレン、アストン、ロニ、フローレンツ、サトウ、ハーンに関する基礎的文献の収集および分析

(2) 19 世紀ヨーロッパにおける神話学、宗教学、人類学に関する基礎資料、および研究文献の収集、分析。

(3) (1) に挙げた日本学者たちとマックス・ミュラーやタイラーなどの当時の代表的な宗教学者、人類学者との関わりについての調査。主に下記の調査を行った。

①チェンバレンとマックス・ミュラーの関係について、チェンバレンがハーンに宛てた手紙、イギリスの National Archives に所蔵されているアーネスト・サトウがアストンに宛てた手紙 (未公刊) 等を分析。

②イギリスのピットリバース博物館が所蔵するチェンバレンからタイラーに宛てた手紙 (未公開) を分析。手紙は、國學院大學千々和到教授より提供を受けた。

③愛知教育大学所蔵のチェンバレン文庫の調査。

(4) 明治期の外国人による日本神話研究が、その後の日本神話研究に与えた影響に関する調査、分析。

①チェンバレンの古事記翻訳に関する国学者の反応に関する資料分析。

②高山樗牛や姉崎正治、高木敏雄等明治期の日本神話研究に関する資料分析。

③國學院大學日本文化研究所に寄贈された D.C.ホルトムの図書のデータベース化、および書き込みのデジタル化と分析。

③古事記翻訳を行っているフランス、ドイツの日本神話研究者への面談調査。

(5) 海外における日本神話研究の歴史と現状についての調査、分析

①國學院大學 21 世紀 COE プログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」第 III グループ「神道・日本文化の情報発信と現状の研究」プロジェクトの研究と連携し、本プロジェクトが主催した国際シンポジウムの内容を分析。オランダ、ドイツ語圏、フランス、アメリカ、韓国における日本神話研究、神道研究の歴史と現状を検討。

②ミルチア・エリアーデの宗教学と日本神話研究に関する資料分析

③海外の研究機関の調査。

フランス国立東洋言語文化研究所のフランソワ・マセ教授、ドイツ・テュービンゲン大学のクラウス・アントーニ教授、同大学のミヒャエル・ヴァフトッカ講師らと面会し、それぞれの国における日本神話研究の現状と学生の動向などについて面談調査。ロンドン大学 SOAS の図書館において日本神話関

係の所蔵図書の調査、および SOAS 教員への面談調査。

4. 研究成果

本研究の成果について、以下にまとめる。

(1) 19 世紀ヨーロッパの神話学、宗教学、人類学と明治期の外国人研究者との関係。

フランス語による初めての古事記翻訳を行ったロニについては、当時の神話学、宗教学との関わりはほとんど見られず、江戸時代の日本の国学者の影響がきわめて強いことが確認された。

チェンバレン、アストン、サトウについては、その著作の分析からマックス・ミュラーやタイラーの研究成果を踏まえ、その上で自身の研究に適宜援用している。とくにチェンバレンの古事記翻訳に関しては、一見ほとんどマックス・ミュラーやタイラーの影響は看取できないものの、書簡資料の分析により、「古事記翻訳」という営為そのものがマックス・ミュラーからの個人的影響によるものであることが明らかにされた。

それは書簡資料の分析からチェンバレンがオックスフォード滞在中に古事記翻訳を決意したことや、そのきっかけがマックス・ミュラーの発言であったことが確認できたためである。

また、ピットリバース博物館所蔵の書簡を分析したところ、チェンバレンがタイラーに宛てた初めての書簡であることが判明した。この書簡の内容分析により、チェンバレンが日本研究者として日本に関する資料をイギリスの学界に提供する役割を担うことを自ら意識し、積極的にその任に当たっていたことが明らかになった。

このようなチェンバレンの役割については、これまで宗教学史のなかで見過ごされてきたものである。その実態が新出資料などにより明らかにされたことは、今後の学説史研究にとって意義深いものと考えられる。

今回の研究では、チェンバレンについての資料が多かった関係で、アストンやサトウ、フローレンツについては十分な調査、研究を行うことができなかった。彼らと 19 世紀の神話学、宗教学、人類学との関係については今後さらなる研究が必要となる。

(2) 外国人研究者間の交流と研究への影響関係。

(1) と連動し、とくに書簡研究が進んでいるチェンバレンを中心に研究者同士の関係について考察した。チェンバレンとロニについて、公刊されていないものの往復書簡の存在は確認されている。また、学術雑誌上でチェンバレンがロニの古事記研究に反論を唱えていることも確認できた。

チェンバレン、アストン、サトウについて

は、日本アジア協会などを通して交流があり、研究活動についても相互に影響関係がうかがえる。神話研究において、具体的にどの箇所に誰の影響があるかという点についてはまだ検討が及んでおらず課題として残っている。

チェンバレンとハーンについては、往復書簡や著作物を通して検討を行った。二人の関係についてはそれぞれ専門家からの詳しい分析があるが、本研究ではチェンバレンがタイラーと交流を持つようになり、チェンバレンがタイラーに、お札等の日本の資料を送るため、その資料収集をハーンに依頼している点に着目した。新出の書簡資料の分析などにより、この三者の関係をより明確に把握することができた。

(3) 明治期の外国人による日本神話研究の影響。

①D. C. ホルトム文庫のデータベース化について。

ホルトムは、アメリカの神道学者で、戦後日本の宗教行政やアメリカにおける神道研究、日本宗教研究にも大きな影響を及ぼしたと言われている。その蔵書は國學院大學日本文化研究所に寄贈されている。そこでその旧蔵書の目録をデータベース化し、書籍へのホルトムの書き込み等をチェックした。

蔵書のなかにはアストンをはじめとする明治期の日本神話に関する翻訳研究も含まれており、なかには複数の書き込みも確認された。この書き込み部分については、撮影しデジタル化してデータベースに組み入れている。

書き込み等についての分析はこれから本格化することとなるが、データベースは7月中に國學院大學のデジタル・ミュージアムで公開される予定となっている

(<http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/>)。

このデータベースは、明治期の日本神話研究が、後の日本宗教研究にどのような影響を及ぼしたのかを分析することを目的としているが、ホルトムの日本研究における役割を考察する上でもきわめて貴重なデータベースであり、その公開は戦後の日本の宗教政策や海外の日本研究に関する研究にとってもきわめて大きな意義を持つと思われる。

②海外における日本神話研究への影響

現在古事記をフランス語に翻訳しているフランス国立東洋言語文化学院のフランソワ・マセ教授とドイツ語に翻訳しているドイツ・テュービンゲン大学のクラウス・アントーニ教授とそれぞれ会合を持ち、それぞれ明治期、昭和期の翻訳をどう評価し、新しい翻訳に活かすか、また翻訳に際して具体的にどのような問題が生じているかについて話し合った。ロニの神話研究は、現在ではまった

く顧みられていないことがあらためて確認できた。しかしチェンバレンについては現在でもかなり有用なものと認識されていることがわかった。ドイツ語の新しい翻訳についても、フローレンツよりもチェンバレンの翻訳が出発点として利用されており、その問題点を洗い出しつつ翻訳するという方法が採られていた。両教授ともフランス語、ドイツ語の新しい翻訳にあたって、本研究による研究成果を利用したいとの申し出があった。

チェンバレンらの翻訳から100年以上がたち、日本について関心を持つ人々はその当時とは比べものにならないほど増えている。あらためて新しい翻訳が求められているという現状のなかで、かつての翻訳、研究を学説史のなかに位置づけていく試みは、国内外で求められているものであると感じた。

なお、本研究において得られた知見については、下記の論文、学会、シンポジウム、研究会で発表した。また、2008年に國學院大學で大学が所有する学術資産の公開を目的として開催された展示会「神話から『古事記』へ—國學院大學学びへの誘い—」の企画、展示に際しては、本研究のために収集された資料も展示され、また研究成果をキャプションとしても公開した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 平藤喜久子 「初期ジャパノロジストたちと神話学」 『東アジアの古代文化』 137号、査読無、大和書房、p.260-263、2009年
- ② 平藤喜久子 「일본신화학과 엘리아데」 『일본신화학과 엘리아데』、査読無、The Korea Institute for Religion and Culture 発行、p.67-76、2007年。
- ③ 平藤喜久子 "Study of Japanese Mythology and Nationalism" 『日本文化と神道』 第3号、査読無、國學院大學 21世紀 COE プログラム研究センター、p. 532-525、2007年
- ③ 平藤喜久子 「各国における神道研究神道研究の現状と課題」 『神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成』 研究報告Ⅲ、査読無、p. 69-82、2007年。
- ④ 平藤喜久子 「神道文献・神道用語の各国語への翻訳をめぐる」 『神道と日本文化の国学的研究

発信の拠点形成』 研究報告Ⅲ、査読無、p. 83-96、2007年。

⑤ 平藤喜久子 「開かれた日本神話」 諏訪春雄責任編集『グローバル化時代の日本人』 勉誠出版、査読無、p.101-102、平成18年。

[学会発表] (計 4 件)

① 平藤喜久子 「チェンバレンの古事記翻訳」 護符・起請文研究会、2009年2月21日、國學院大學。

② 平藤喜久子 「外国人留学生の日本宗教への関心」 国際研究フォーラム「ウェブ経由の神道・日本宗教—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—」、2008年10月26日、國學院大學。

③ 平藤喜久子 "Study of Japanese Mythology and Nationalism" France-Japan International Joint Seminar :Religion, Religious Studies and Nationalism in Contemporary Japan、2006年11月3日、EHESP, 105 bld Raspail, 75006, Paris

④ 平藤喜久子 「日本の神話学とエリアーデ」 Korea-Japan Joint Seminar on Religious Studies 2006 "Reconsidering Eliade from the East Asian Perspectives"、2006年6月24日。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

研究代表者 平藤喜久子
國學院大學研究開発推進機構専任講師
研究者番号：50384003

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし